

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 9 日現在

機関番号：12201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520606

研究課題名(和文) インタラクションのIRF構造による英語授業、教員養成・研修プログラムの調査分析

研究課題名(英文) Research on EFL Lessons and EFL Pre- and In-service Programs by IRF Interaction Structure

研究代表者

渡辺 浩行 (Watanabe, Hiroyuki)

宇都宮大学・教育学部・教授

研究者番号：40275805

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：授業分析から、D-IRFインタラクションは英語コミュニケーション力の育成に有効で、授業実践、教員養成・研修のプログラムに必要なことが明らかになった。MA7要素とD-IRF8要素が多いほどインタラクションは豊かになり、教師の語り口はIDS的特性を持ち、児童・生徒には英語コミュニケーション力向上に望ましい反応が多く認められた。また、そのようなインタラクションを提示する教員養成・研修プログラムでは、プログラム参加者に、D-IRFインタラクションのある授業(改善)をめざす意識変容が起こることが分かった。

研究成果の概要(英文)：This research found some positive effects of D-IRF interactions upon the acquisition of EFL communication skills and suggests D-IRF interactions in EFL classes and pre-service and in-service EFL teacher training programs. As 7 MA elements and 8 D-IRF elements increase in the interactions, the teacher reveals more IDS features and the learners more favorable acquisition signs of EFL communication skills. Incorporating D-IRF interactions into EFL teacher training programs, both pre-service and in-service, raised the awareness of the program participants towards the active treatment of D-IRF interactions in their teaching practices and practice reformulations.

研究分野：社会科学

キーワード：授業分析 授業実践 教員養成 教員研修 インタラクション D-IRF MA IDS

1. 研究開始当初の背景

従来の教室内インタラクションにおける IRF 構造(Initiation・Response・Follow-up)では、follow-up は反応の正しさを評価する evaluative なもので、インタラクション、インプット、アウトプットはそこで止まっていた。他方、教室外インタラクションの follow-up は相手の反応に回答する discorsal な性質で、インタラクションは自然に継続し、それに伴いインプットもアウトプットも持続し、両者とも増えていく。このことから、教室内でも E-IRF (evaluative follow-up) インタラクションだけではなく、D-IRF (discorsal follow-up) インタラクションも展開する必要がある (Cullen, 2002; Taylor & Fu, 2006; 渡辺・太田, 2011)。

2. 研究の目的

本研究では、授業におけるインタラクションの IFR 構造に焦点をあて、follow-up が evaluative か discorsal かによる違いを理論と実践の両面から研究する。同時に、教員養成機関(大学等)と研修機関(都道府県教育委員会等)で、どちらが重視されているかを調査する。その結果、D-IRF インタラクションが英語コミュニケーション能力育成(指導)に有効であると証明されれば、授業実践、教員養成・研修のプログラムにおいて、これに取り組む必要があることが明らかになる。

3. 研究の方法

研究方法として次の4つの活動を実施する。

これまで研究代表者・分担者が行ってきた関連する2つの科研費研究成果の活用。

D-IRF インタラクションと E-IRF インタラクションの有効性・可能性・問題点・課題の検証(理論と実践調査分析から)

教員養成・研修機関のプログラム内容の2

つのインタラクションによる実態調査。

研究結果にもとづく授業実践・教員養成・研修への提案、成果発表、報告書作成。

4. 研究成果

研究成果は「授業分析」「教員研修」「教員養成」に分けて記述する。

(1)授業分析

各年度別に授業分析結果を報告する。

平成 24 年度

D-IRF インタラクションの方が英語コミュニケーションの素地、基礎を培うことが明らかになった。授業実践では圧倒的に E-IRF タイプが多く、D-IRF タイプは極限られているが、本研究と科研費「児童・生徒の意識調査と言語習得研究の観点による小中連携の授業」(課題番号 22520634・平成 22~24 年度)により、小学 5・6 年生と中学 1 年生が D-IRF インタラクションの活動を「好き」「受けたい」と評価し、第二言語習得研究や教育学(授業学)の観点からも、D-IRF インタラクションの方が英語コミュニケーション力育成により優れていることが分かった。

平成 25 年度

平成 23 年度に文科省から配布されたモデル授業 DVD(小中高合わせて約 12 の授業/活動)を、インプットを理解可能にする MERRIER Approach (MA) の 7 要素とインタラクションを継続させる D-IRF の 8 要素で分析した。

その結果、表 1、2 が示すように、授業・活動によって差があり、15 要素が十分にある授業は多くないことが明らかとなった。

Model (or Mime)	ジェスチャー、視覚教材を示す。
Example	具体例などを使って話す。
Redundancy	同じ内容を表現を変え、発想を変えて話す。
Repetition	大切な内容や文は繰り返しながら話す。
Interaction	生徒と相互交渉しながら話す。
Expansion	何気なく訂正し better な形に言い換えて話す。
Reward	発話に対しては積極的な評価を言葉で表わす。

校種 学年 クラス	MERRIER Approachの7要素							合計
	M	Ex	Ry	Re	I	E	R	
小5	24	4	3	28	22	15	64	161
小6	27	5	11	38	16	25	63	185
中1A	52	0	12	104	20	0	20	208
中1B	9	4	0	13	0	0	26	52
中2C	11	6	17	83	19	0	31	167
中2D	8	12	28	60	32	20	20	180
中3	27	29	88	108	73	12	80	418
高1E	0	6	0	6	15	2	13	43
高1F	0	10	2	46	94	8	15	175
高2G	0	0	3	11	11	0	6	31
高2H	28	19	6	9	30	0	9	100
高3	54	2	35	69	223	17	19	419

表1. MA7要素とMA7要素による比較分析

Repetition	繰り返し
Elaboration	詳述
Further Information	情報付加
Comment	コメント
Self-Disclosure	自己開示
Reformulation	言い換え(正しい、よりよい)
Referential Question	尋ねないと答えがわからない質問
Question to Individual Learner	個人への質問

校種 学年 クラス	D-IRFの8要素								合計
	Re	El	FI	C	SD	Rf	RQ	QIL	
小5	58	0	5	16	7	13	4	0	103
小6	25	0	6	12	4	16	4	7	74
中1A	12	0	0	0	0	0	0	0	12
中1B	13	0	0	0	0	0	0	0	13
中2C	17	0	8	3	8	6	8	17	67
中2D	40	20	20	16	0	24	4	4	128
中3	45	4	4	12	2	8	41	29	145
高1E	2	0	4	19	9	4	2	2	43
高1F	65	23	23	13	2	17	35	71	248
高2G	14	0	0	26	0	3	0	0	43
高2H	17	0	0	11	0	4	7	6	44
高3	77	17	4	37	4	37	23	27	225

表2. D-IRFF8要素とDF8要素での比較分析

平成26年度

3つの小学校英語授業(A、B、C)の比較分析を行った。その結果はA>B>Cとなり、MA7要素とD-IRF8要素が多いほどインタラクションが豊かで、教師の語り口はIDS(Infant Directed Speech)的特性を持ち、児童には英語コミュニケーション力向上に望ましい

反応が多く認められた(表3~6)。

授業	MA7要素							
	M	Ex	Ry	Re	I	E	R	合計
A	13	4	0	11	5	8	3	44
B	0	1	1	1	0	4	33	40
C	2	1	0	2	4	0	4	13

授業	D-IRF8要素								
	Re	El	FI	C	SD	Rf	RQ	QIL	合計
A	40	44	24	8	4	14	34	4	172
B	3	13	0	2	0	0	0	9	27
C	0	1	0	0	0	1	1	0	3

表3. MA7・D-IRF8要素による3授業の比較

授業	音声特徴(IDS的特性)		
	抑揚(高低)	速さ(緩急)	強弱(めりはり)
A			
B	○	○	○
C			

表4. 教師の発話音声のIDS的特性比較

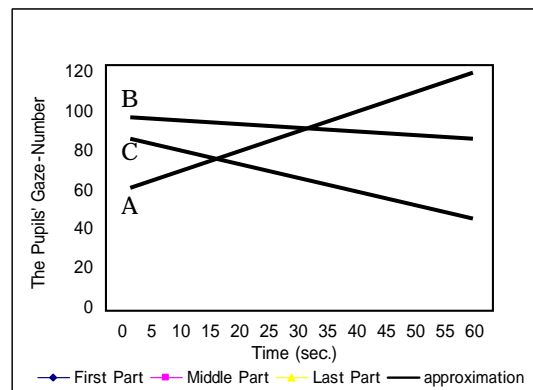


表5. 児童の注視率比較

授業	教師の全発話(平叙文)に対する児童の自発的な繰り返しの割合
A	86%
B	3~4%
C	3~4%

表6. 児童の自発的繰り返しの比較

別の小学校での授業変容分析では、優れた授業変容にはMA7要素、D-IRF8要素、教師のIDS特性、児童の好ましいコミュニケーション反応が豊富にあることがわかった。同様に、

前記 4-(1)- で触れた、中学生が「楽しい、受けたい、英語の聞く・話す力がつく授業」と評価した中学英語授業(活動)は、そうではない授業(活動)より MA7 要素、D-IR8 要素、IDS 特性、好ましいコミュニケーション反応に富むことが分析結果から明らかとなった。さらに、教育実習生(中学英語)の授業変容にも MA7 要素、D-IRF8 要素の増加が確認された。

以上、平成 24~26 年度にわたる授業分析結果から、D-IRF インタラクシオンは英語コミュニケーション能力育成(指導)に有効であることが証明された。

(2) 教員養成

国内外の教員養成の文献や資料を入手し、その効果的プログラムと意義について調査した。また小学校で英語を教科としている中国、韓国、台湾からシンポジストを招聘し、養成と研修について議論した。さらに、大学生に E-IRF 活動と D-IRF 活動の授業を見せて振り返らせることにより、省察的能力を育成し、実践的指導力を伸ばす可能性を模索した。

小学校英語担当教員の教育実践力育成のために、具体的なカリキュラムの位置づけや方法論を提示した。また、小学校教員養成課程(英語選修)の学生に、「インタラクシオン(D-IRF 要素)」重視の小学校英語の授業実践を振り返らせ、省察的能力を育成し、実践的指導力を確立する可能性を検証するとともに、小学校英語の教員養成のための履修基準や教職関連科目(初等教科教育法など)の枠組みを構築した。

(3) 教員研修

すでに、「小学校英語教育に関わる指導者研修モデル・指導者養成カリキュラムの開発」(課題番号 20520545・平成 20~23 年度)において、小学校教師は D-IRF インタラクシオンの活動を指導したいが、それが出来ないで、E-IRF インタラクシオンの活動を指導

してしまう、という実態を明らかにした。

そこで本研究では、教員研修において 2 つのインタラクシオンのどちらが重視されているかを全国調査するのではなく、研修における、2 つのインタラクシオンに関する教師の意識と意識変容を調べることにした。

まず、2 つのインタラクシオン活動に的を絞った研修を実施した。両活動のビデオ視聴と児童生徒がそれをどう受け止めたか*を示すことで、小中高研修受講者にとっては各自の授業を振り返り、改善点を探るきっかけになった。また、第二言語習得研究者、教育学研究者、教員養成・研修の研究者らと具体的な授業内容(E-IRF・D-IRF 活動など)を取り込んだ研修の在り方について議論を重ねた。

同様に、インタラクシオンの 2 つのパターンの授業ビデオを視聴させ、違いを考える課題を入れた研修プログラムを行った。両者の違いを考えさせた後、研修受講者自身の授業ではどちらが多いか、どのように改善していきたいかを省察してもらったところ、受講後のフィードバックから、自分の授業が evaluative な feedback が多いことに気づき、改善の必要性を感じるなど、研修で学んでいることを自分の授業に引き寄せるといった課題の有効性、学びの深まりが明らかとなった。

* 科研費「児童・生徒の意識調査と言語習得研究の観点による小中連携の授業」(課題番号 22520634・平成 22~24 年度)の調査で用いた E-IRF インタラクシオンと D-IRF インタラクシオンのビデオとそれに対する児童・生徒の反応

< 引用文献 >

Cullen, R. (2002). Supportive teacher talk: the importance of the F-move. *ELT Journal* 56/2:117-26.

Taylor, L. & Fu, S. (2006) ASPECTS OF

TEACHERS' FEEDBACK ON STUDENTS' CONTRIBUTIONS IN CLASS. *IATEFL RESEARCH SIG NEWSLETTER Issue 18 August 2006.*

渡辺浩行・太田洋(2011)「小学校外国語活動の教員研修・養成を支援する活動例の有効性」『第37回全国英語教育学会予稿集』pp.124-125.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

本田勝久・神谷昇・町村貴子・高橋広野、「台北市における外国語学習環境 - ひとつのカリキュラムと様々な授業実践 - 」『千葉大学教育学部研究紀要』第63巻、2015年3月1日、pp.71-76

太田洋、「【中学校】来年度から取り組めること、取り組んでおくべきこと - 「知識型から活用型への授業改善」そのためのサポートを - 」『教職研修』、2015年1月、pp.71-73

渡辺浩行、「学校文化、学習観を正しての「指導技術の見直し」」『英語教育』、2014年7月、pp.22-24

本田勝久・直山木綿子・程 晓堂・鄭 英淑・載 雅茗・丁 玉良・高益民・松宮奈賀子・アレン玉井光江・粕谷恭子・建内高昭・高木亜希子、「Symposium: Primary English Education in East Asia (東アジアにおける小学校英語シンポジウム)」、『平成24年度文部科学省グローバル人材育成推進事業、2013年3月18日、43頁

太田洋、「「引き算」目線で授業を見直す先生だけががんばる授業から生徒ががんばる授業へ」『英語教育』、2014年2月、pp.10-12

太田洋、「帯活動の意味 Teaching + Learning だからこそ」『英語教育』、2012年5月、pp.10-12

[学会発表](計19件)

本田勝久・柏木賀津子・松沢伸二・佐藤臨太郎、「小学校英語 - 教員をどう養成す

るか」、大学英语教育学会(JACET)教育問題研究会 言語教育エキスポ2015シンポジウム、2015/3/15、早稲田大学(東京)
Katsuhisa HONDA & Takaaki TAKEUCHI、Pre-service Training Standards for Elementary English Education in Japan、The 9th East Asia International Symposium on Teacher Education: SMART Education and Teacher Education in Digital Era、November 4、2014、Daejeon (Korea)

本田勝久・建内高昭・粕谷恭子・高木亜希子、「小学校英語教員養成のための教職実践演習 - 教科化のための枠組みをめざして - 」、『平成26年度日本教育大学協会研究集会、2014/10/18、仙台国際センター(宮城)

渡辺浩行・太田洋・本田勝久、Designing a new way of implementing teacher development and teacher training programs、第12回AsiaTEFL国際大会、2014/8/29、クーチン市(インドネシア)

渡辺浩行、Classroom Interaction and Motherese (Infant Directed Speech)、第12回AsiaTEFL国際大会、2014/8/28、クーチン市(インドネシア)

鈴木博司・渡辺浩行、「よりよい外国語活動実現のための校長のリ - ダ - シップの発揮 - 豊かなコミュニケーション能力を育てる外国語活動の推進 - 」、『小学校英語教育学会第14回研究大会、2014/7/27、関東学院大学(横浜市)

星義夫・渡辺浩行、「英語のやりとりに興味を持ち、自ら反応したくなる外国語活動 - やりとりの興味を高める工夫 - 」、『小学校英語教育学会第14回研究大会、2014/7/26、関東学院大学(横浜市)

建内高昭・本田勝久・太田洋、「台北教育大学附属小学校における英語授業 - COLT

Part A による授業分析を通して - 』、小学校英語教育学会第 14 回研究大会、2014/7/26、関東学院大学（横浜市）
小泉仁・本田勝久・直山木綿子、「指導者養成・研修の在り方 - 教科化に向けて - 』、日本児童英語教育学会（JASTEC）第 35 回全国大会シンポジウム、2014/6/29、青山学院大学（東京）
渡辺浩行・太田洋、「小学生（5、6 年生）と中学生（1 年生）が好み、受けたいと思う英語の授業」、関東甲信越英語教育学会第 37 回大会、2013/8/18、松本歯科大学（松本市）
塩井博子・渡辺浩行、「豊かなインタラクシヨンのある授業を目指して」、関東甲信越英語教育学会第 37 回大会、2013/8/18、松本歯科大学（松本市）
太田洋・渡辺浩行、「中学生の興味関心から見た英語授業 - 生徒はどのような特徴を持つ授業を好み、受けたいと思い、役立つと思うのか - 』、全国英語教育学会第 39 回大会、2013/8/11、北星学園大学（札幌市）
渡辺浩行・太田洋・本田勝久、「コミュニケーション能力の素地、基礎、育成をめざす英語指導 - モデル授業 DVD の分析結果をふまえて - 』、全国英語教育学会 39 回大会、2013/8/10、北星学園大学（札幌市）
太田洋・渡辺浩行、「小学生が好む活動の特徴 - 好きだ、受けたい、役立つと思う活動とは？ 』、小学校英語教育学会第 13 回大会、2013/7/15、琉球大学（沖縄）
渡辺浩行・太田洋、「授業実践、教員養成、教員研修をつなぐ授業分析 - 小学校編 』、小学校英語教育学会第 13 回大会、2013/7/14、琉球大学（沖縄）
渡辺浩行・太田洋、「社会主義学習観と D-

IRF 構造でとらえた英語活動の有効性 』、関東甲信越英語教育学会第 36 回大会、2012/8/18、前橋共愛学園大学（前橋市）
本田勝久・渡辺浩行・太田洋、「小学校外国語活動のための授業、教員研修・教員養成におけるインタラクシヨンの取り組みの実態 』、関東甲信越英語教育学会第 36 回大会、2012/8/18、前橋共愛学園大学（前橋市）
塩井博子・渡辺浩行、「Discoursal Follow-up が授業を変える - インタラクシヨンの継続のための教師の働きかけ - 』、全国小学校英語教育学会第 12 回大会、2012/7/16、千葉大学（千葉市）
太田洋・渡辺浩行、「児童の興味関心・価値観からみた外国語（英語）活動 - 児童・はどのような授業を好み、受けたい、役立つと思うのか - 』、全国小学校英語教育学会第 12 回大会、2012/7/16、千葉大学（千葉市）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕
出願状況（計 0 件）

取得状況（計 0 件）

〔その他〕

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渡辺 浩行 (WATANABE HIROYUKI)
宇都宮大学・教育学部・教授
研究者番号：40275805

(2) 研究分担者

太田 洋 (OTA HIROSHI)
駒沢女子大学・人文学部・准教授
研究者番号：30409825

本田 勝久 (HONDA KATSUHISA)
千葉大学・教育学部・教授
研究者番号：60362745

(3) 連携研究者

なし